

引用節内のモダリティ形式と主節述部・被修飾名詞との関連性 —意味分類を基に—

佐藤雄亮

(東京外国語大学大学院博士後期課程地域文化研究科)

キーワード：モダリティ 引用節 現代日本語書き言葉コーパス 分類語彙表

1. 本研究の目的

本研究は、例 (1) のように、「と」や「って」などを用いる「引用節¹」内にモダリティ形式が現れる用例について論じるものである。

- (1) 初め、野々宮が何かを企んで出鱈目を言っているのではないかと疑ったが、それなら彼が自分と森本を知っているわけがない。(深谷忠記「指宿・桜島殺人ライン」²)

例 (1) の「引用節—主節述部」では、「出鱈目を言っているのではないか」と考えることが、「疑う」ことだということが表現されている。次節で見る先行研究で指摘されているように、「疑う」など主節述部は、「のではないか」を用いた節がどのような行為・思考であるかを換言したものとなっているわけである。

本研究の主な主張は、(1) の「疑う」のように、モダリティ形式を含む引用節と共に起する主節述部の意味、およびその数量的分布に、各モダリティ形式の意味の違いが反映していること³、そしてそれが意味の記述に対する実証的な根拠となる、という点である⁴。考察においては、日本語の大規模書き言葉コーパスを用い、数量に対して統計的分析を加えることで、考察の客観性を保つよう留意した。以下、2 節で先行研究の言及をまとめ、3 節で考察対象となるデータの収集と整理の方法について述べる。4 節が本研究の本論であり、調査結果とその分析を行う。5 節は本研究のまとめである。

2. 先行研究

引用節との共起における差異に基づき、モダリティ形式の意味を論じる研究はあまり見られない⁵。その中で、森山 (1988)、藤田 (1986, 2000) は本研究にとって参考に

¹ 以下、日本語記述文法研究会 (2008) に従いこの用語を用いる。

² 以下、例文においてはモダリティ形式に当たる部分に下線を、引用節を受ける主節述部・被修飾名詞に囲み線を付す。用例の出典には (著者「タイトル」) を付す。

³ 後述するように、実際には主節述部ではなく被修飾名詞となっているものについてもその共起を論じることになる。

⁴ モダリティ形式の従属節における出現の可否という文法的性質を指摘した研究として、南 (1974, 1993) などが挙げられる (それらの現象から各形式の意味の説明も試みられている)。

⁵ 大規模なコーパスからの用例数やその割合の違いを基に、前述の南の考察なども参照しながら、モダリティ形式の類型化を論じるナロック (2006)、Narrog (2009) を本研究は参考にしてはいる。ただし、ナロック (2006)、Narrog (2009) は、南 (1974) の言う A~C 類の従属節内にどのようなモダリティ形式が現れるのかという点を論じたものであり、引用節内のモダリティ形式を取り上げる

すべき先行研究である。

森山 (1988) は上の観点を「報告動詞分析」と呼び、『文』ト〜スルというように、文の発話的な意味をどう報告するかによって、その文の表現的な意味を考えようとするものである」と説明する (森山 1988: 249)。例として、「だろう」を用いた文が「[彼はもうすぐ大学をやめるだろう]と判断する/した。」と、「命令的な表現の文」が「[すぐ部屋に來い]と命ずる/命じた。」とそれぞれ言えることなどが指摘されている。

特定の主節述部が取る引用節に、どのような性質が認められるか考察を進めた諸論考が藤田 (2000) に収められている。日本語には、「おはようと言った。」など、「述部が引用句の発言・思考と事実上等しい動作・状態を表す」典型的な引用と言えるもの(「第Ⅰ類の引用」)と、「おはよう。」と鈴木が入ってきた。」などのように「述部が引用句の発言・思考と共存する動作・状態を表す」もの(「第Ⅱ類の引用」)の二種類が認められる (藤田 1986, 2000)。この内、第Ⅰ類に該当する例では、「言った」などの主節述部は、「おはよう」という具体的な発言・心内発話に対して、抽象化を行ったものと見ることができる (藤田 2000: 71-72)。この点を踏まえ、藤田 (2000: 199-380) では、それら「抽象化」に着目し、主節述部が「と疑う/知る/後悔する/宣言する/約束する/聞く/名づける/名のる」である場合に引用節が示す性質に関して考察されている。第Ⅰ類と異なり、第Ⅱ類の引用に見られる「引用句と共存する動作・状態」は、ある程度の緩やかな条件さえ満たせば、文脈に支えられて大抵の表現が許容されてしまう (藤田 1986: 213; 2000: 224) ものとされるため、引用節と主節述部の意味上の結び付きは弱いと判断できる。

本研究は、これらの先行研究を参考に、モダリティ形式を含む引用節と共起し、「第Ⅰ類の引用」を構成する主節述部を分析することによって、各モダリティ形式(を用いた節)がどのような行為・状態を表すものと捉えられているか考察するものである。

3. 研究方法

3.1. 用例の収集方法

本研究では、考察の対象をモダリティ形式の一部に限定する。具体的には、宮崎 (他) (2002)、日本語記述文法研究会 (2003) などにおいて「認識のモダリティ」を表す形式として挙げられた全ての形式、すなわち〈だろう〉〈かもしれない〉〈にちがいない〉〈にきまっている〉〈はずだ〉〈ようだ〉〈みたいだ〉〈(する) そうだ〉〈らしい〉〈のではないか〉の 10 形式⁶、および「評価のモダリティ」に属するとされる形式の代表例として〈なければならぬ〉〈ほうがいい〉を取り上げる。

今回は、これらの形式が、動詞もしくは形容詞に接続し、かつ引用を表す「と」「って」、もしくは例示を表す「など」「なんて」を用いて藤田 (1986, 2000) の言う「第Ⅰ類の引用」を表しているという条件を満たす用例を考察対象とした。

引用に関連して、「という」や「との」を介した名詞修飾表現がある。調査におい

本研究とは着眼点異なる。

⁶ 〈だろう〉〈かもしれない〉〈そうだ〉が〈の(だ)〉を前接させる形式の内、〈の(だ)〉については〈だろう〉〈だろうか〉〈の(だ)だろうか〉と共に佐藤 (2010) で論じた。〈のかもしれない〉〈の(だ)そうだ〉に関する考察は今後の課題である。

て、この「という」「との」を用いた名詞修飾と、モダリティ形式との共起が一定数認められた。こういった用例の内、次の「疑い—疑う」のように、被修飾名詞を用言化することで【引用節—主節】の関係が読み取れるものについては、本研究での考察対象に含めた。

何か盗んだのではないか {という／との} 疑い 【「という」による名詞修飾】
 何か盗んだのではないかと 疑う 【引用節—主節】

「という」「との」を介して修飾される名詞が、具体的な意味が希薄な名詞である例の内、「問題が起こるだろうということが懸念される」のような例は、「だろうと懸念される」への置き換えが可能であることから、考察対象に含める。この場合、「こと」などではなく、「懸念される」などを、引用節と共起する主節述部として認める。

具体的な意味が希薄な名詞の例であっても、その全てが考察の対象となるわけではない。例えば、「問題が起こるかもしれないという点を見逃した。」などは、引用節と「見逃す」の間に上の例のような関係性が無いため、「問題が起こるかもしれないと見逃した。」には置き換えられない。このような例は考察の対象外とした。

本研究で用例収集に用いるコーパスは、国立国語研究所が公開している、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ (=BCCWJ ; 2008 年度版) である。今回はジャンルを限定せず、コーパス全体からの用例を考察対象とした⁷。用例の検索は、BCCWJ 内に含まれる『ひまわり』BCCWJ パッケージ⁸を用いた⁸。

3.2. 用例の分類基準

前節の方法で収集した用例について、引用節を受ける主節述部あるいは被修飾名詞を、意味によって分類したものを本研究の考察材料とする。コーパス検索で得られた用例のそれぞれについて、「と (いう)」などを受ける主節述部・被修飾名詞を特定し、それらの語について『分類語彙表』における「分類項目番号」およびそれに対応する項目名を付与し、各例の意味分類とする⁹。論じる内容によっては、さらに下位の分類

⁷ このコーパスには「書籍」「白書」「国会会議録」「Yahoo!知恵袋」という収録媒体別のデータが収められている。

⁸ 以下の正規表現を①～⑤の順に並べたものを検索語とした。

① 「動詞・形容詞終止形」の指定：[うくぐすつぬぶむるいただ] (ただし〈なければならない〉では前に接続する文字列を指定しなかった。「見-なければならない」などの例があり、一様な文字列指定ができないためである)

② モダリティ形式 (の諸形式) を指定するための要素 (各形式とも、過去/非過去、普通体/丁寧体の違いを考慮した文字列指定を行った。「かも知れない」「に違いない」など、漢字表記も可能なものはそれらも収集の対象とした)

③ 文末で現れうる要素：[?!、…] ※ 「0回以上の出現」で指定

④ 引用表現の指定：(と|って|なんて|など) 文字列が一致していても、考察対象と異なる意味を表すものについては全て手作業で省いた。

⁹ 以下は、『分類語彙表』の分類を筆者が改めたものである。

(a) 『分類語彙表』に無い語：筆者の判断によって、置き換えが最も適切と考えられる語の番号を付与する

(b) 同一品詞内で複数の項目に出現する語 (例：「訴える」は、「2.3123」「伝達・報知」、「2.3611」「裁判」に掲載)：同じ分類項目内に掲載される語などを参考に、各例における意味に最も合致

として設けられる「段落」¹⁰を利用する箇所もある。

4. 調査結果と考察

4.1. 全体数の確認

まず、今回対象とする用例の全体数を、出現頻度の多い形式から順に表 1 に示す。ただし、「評価のモダリティ」の〈なければならない〉〈ほうがいい〉に関しては別扱いとした。

表 1: 全体の用例数

形式	な い で か は	だ ら う	れ か な い し	は ず だ	い に ち が い が	ら し い	よ う だ	に き ま っ て い る	そ う だ	み た い だ	ほ う い が	な ら な け ら な い ば
用例数	3730	1199	293	168	101	80	42	10	7	2	1023	704

表 1 から明らかなように、引用節において最も多く用いられるモダリティ形式は〈のではないか〉であった。それに次ぐのは〈だろう〉であり、〈かもしれない〉〈はずだ〉〈にちがいない〉など「可能性・必然性」を表すとされる形式の例はぐっと減る。〈らしい〉〈ようだ〉〈そうだ〉〈みたいだ〉など、「証拠性」を表すとされる形式の例はさらに少ない（「可能性・必然性」の〈にきまっている〉がその間に存在する¹¹）。

「第 I 類の引用」において、引用節は、思考・感情を表す場合と、発話・表出を表す場合とがある（藤田 2000: 209）。今回の調査結果においても、引用節を受ける主節述部・被修飾名詞は、『分類語彙表』での項目番号 3000 番台「心」（思考・感情を表すもの）と、3100 番台「言語」に分類されるものが大半であった。以下、思考・感情に関わるもの、表現に関わるものの順に、各モダリティ形式別の特徴をまとめる。なお、次に挙げるような〈にきまっている〉〈そうだ〉〈みたいだ〉に関しては用例数が少なく、共起する語の分布を問うことの有効性は無いと判断し、以下ではこれら 3 形式については言及しない。

する項目の番号を付与する

(c) 派生関係にある語が特定の品詞で複数の分類項目番号に割り振られている場合：（「心配」は名詞・動詞において"x.3013", "x.3061", "x.3062"の 3 箇所に掲載されているが、形容動詞としての用法は"3.3013.05"にのみ掲載）：最も多くの品詞に共通する項目番号（「心配」の場合は"3013"）を付す

(d) 『分類語彙表』が考慮しているのとは違う意味の用例であると思われる場合：類似する語の分類項目番号に変更する

(d) の例として次の例を挙げる。

「そろそろ運転免許の試験を受けてみようか」と、自動車局（DMV）のウェブサイト調べてみた。（中略）「カリフォルニアで職を得るもの、または居住するものは、一〇日以内にカリフォルニアの免許を取得しなければならない」とある！（「超」アメリカ整理日誌）

この例の「ある」は、『分類語彙表』に記載される「存在」ではなく、「記載されている」という意味になっている。この例の「ある」は"2.3151"「書き」に意味分類を変更した。

¹⁰ 「段落」は「意味上の語集団」を指すとされ、それぞれ二桁の数字が割り振られるが、項目名は当てられていない。

¹¹ 「可能性・必然性・証拠性」については、宮崎他（2002）、日本語記述文法研究会（2003）などの説明を参照のこと。

- (2) 彼はドクター・マックが好きだが、この勝負、デルーカ看護師が勝つに決まっていると思った。(堺谷ますみ「ドクターは敵?」)
- (3) いよいよ平家の追討軍がやってくるそうだ、という噂も耳にした。木曾ノ義仲挙兵、とも風の便りに聞こえてきた。(中津文彦「義経の征旗」)
- (4) やがて、父のいびきが聞こえてきた。子どもの頃は怪獣が吠えてるみたいだと思っていたいびきの音に紛らせて、僕は、少しだけ泣いた。(重松清「熱球」)

4.2. 思考・感情に関わる述部・名詞の用例分析

4.2.1. 用例数の確認と統計的処理について

本節では『分類語彙表』の 3000 番代の分類項目、つまり思考・感情に関わる主節述部・被修飾名詞が、モダリティ形式を含む引用節と共起する例について論じる。表 2 に、本節で対象とする用例の数を示す。『分類語彙表』での分類項目は名詞・動詞・形容詞類で共通した番号が付与されているため、同じ分類項目であれば品詞の違いは考慮せずまとめて示す。この表に限らず、これ以降該当する用例が 1 例も得られない項目は、欄をグレーで塗りつぶす。「語例」の欄には、多く見られた語を挙げた。

表 2: 思考・感情を表す主節述部・名詞の用例数

分類項目名	項目番号	語例	な い で か は	だ ら う	れ か も し な い	は ず だ	い に ち が な い	ら し い	よ う だ	い い ほ う が	な ら な い な ら ば
心	3000	心理		1							
感覚	3001	気がする・感じる	224	20	12	1	4	1	1	3	10
感動・興奮	3002	痛感する ・感心する	3				1				2
感情・気分	3010	気分・心境	3		1						
快・喜び	3011	わくわくする	1	1							
恐れ・怒り ・悔しさ	3012	恐れる・恐怖	44		7				1		2
安心・焦燥 ・満足	3013	心配する・懸念	293	13	17				2		
苦悩・悲哀	3014	悩む・悲観する	4		2						
好悪・愛憎	3020	気遣う・同情する	5	4	1						
敬意・感謝 ・信頼など	3021	不信感	2								
表情・態度	3030	笑う								1	
信念・努力 ・忍耐	3040	苦勞									1
自信・誇り ・恥・反省	3041	反省・後ろめたい	9	3			1				1
欲望・期待 ・失望	3042	期待する・希望	38	15	11		1			2	2
意志	3045	意向・腹づもり	3	2					1		2
道徳	3046	信		1							2
信仰・宗教	3047	念じる									1
学習・習慣 ・記憶	3050	記憶する・習う	2	1						2	
知・知識	3060	常識	1								

分類項目名	項目番号	語例	ないで かは	だろ う	れか もし ない	はず だ	いに ちが い	らし い	よう だ	ほう が いい	なけ らな いば
思考・意見 ・疑い	3061	思う・考える	2420	767	136	104	63	8	5	837	386
注意・認知 ・了解	3062	わかる・気が付く	58	16	9	4	5	22	1		20
測定・計算	3064	予測する・試算	12	16	1		2				
研究・試験 ・調査・検 査など	3065	分析する・調査	2	2	1						1
判断・推測 ・評価	3066	想像する・推測する	149	77	12	5	11	7	1	15	6
決心・解決 ・決定・迷い	3067	結論・覚悟する	6	9	4	3	3			1	137
意味・問題 ・趣旨など	3070	話題・イメージ	2	4				1			16
論理・証明 ・偽り・誤 り・訂正など	3071	理屈・仮説	9	5		1			1	2	2
説・論・主義	3075	説・主張	15	1	1	1					5
原理・規則	3080	原則・法律								1	7
制度・慣例	3082	制度									2
計画・案	3084	準備									1
見る	3091	発見する ・観測する	3					2		1	
見せる	3092	指摘する・示す	68	6		1				1	2
聞く・味わう	3093	聞く	7	4	3	2		15	1	19	2
小計			3383	968	218	122	91	56	14	885	610
その他			347	231	75	46	10	24	28	138	94
合計			3730	1199	293	168	101	80	42	1023	704

先の表 1 に示した全体の値と、この表 2 における合計の値を対照すれば、モダリティ形式が引用節で用いられるのは、表 2 にまとめたような、引用節の内容に関して思考したこと、何らかの感情を抱いたことを表す語と共起する場合がほとんどであることがわかる。用例数がもっとも多いのは〈のではないか〉であり、分類項目の広がりも〈のではないか〉において 34 項目中 26 項目と、最も広い。以降、〈だろう〉〈かもしれない〉の順に項目数は減少し、〈はずだ〉〈にちがいない〉〈らしい〉〈ようだ〉に関してはそれぞれ 10 項目を割る。

最下段の合計数を見てもわかるように、単純な用例数の比較では〈のではないか〉が最も用いられやすい形式であり、その偏りは大きいように見える。しかしこれらの数値が統計的にも偏りを持った結果なのかどうかは別に確認する必要がある。本研究では、その点を分析する方法として、「理論的に期待される値からどれだけずれているか」というデータを用いる。

期待値と観測値のずれの尺度としては、カイ二乗検定に用いられるカイ二乗値（計

算式は $[(期待値-観測値)^2/期待値]$ を用いる¹²。引用節で用いられる用例全体の中で、それぞれの分類項目に特徴があるかどうかを確認するため、期待値は「その他」の分類項目の用例数も含めた、全 7340 例を用いて算出している¹³。収集した用例数が期待値から大きくずれる程、それは統計的に偏っている（つまり、何らかの解釈すべき理由が存在する）ことになる。次の表 3 にその値を示した（小数点以下第 2 位を四捨五入して表す）。ずれの尺度が 1 より大きい値については、観測値が期待値よりも多いものに (+)、少ないものに (-) を付与した¹⁴。期待値からのずれが大きい上位 15 個の値には斜字体・下線を付して示した¹⁵。つまり、それらは何らかの理由で特に多い (+)、あるいは少ない (-) 値を示した箇所だということになる。

カイ二乗値の分布から、用例数（ここでの「観測値」）の偏りに反して期待値と観測値の違いが大きいのは必ずしも〈のではないか〉に限られないことが見て取れる。以下、上の表 2、表 3 において顕著な値を示した箇所について論じる。

4.2.2. モダリティ形式と感情を表す語との共起

表 3 中での〈のではないか〉の値の内、その用例数が顕著に多いという結果を示したものに、"3013"「安心・焦燥・満足」がある。〈のではないか〉とは逆に、〈だろう〉と「安心・焦燥・満足」の語との共起例は期待値に対して少ない。

本節では、この「安心・焦燥・満足」を始めとして、主節述部・被修飾名詞が、引用節の内容に対しての何らかの感情を表すものについて論じる。対象となるのは「安心・焦燥・満足」以外に、"3012"「恐れ・怒り・悔しさ」、"3014"「苦悩・悲哀」、"3021"「敬意・感謝・信頼など」内の「不信感」（肯定的な語の例は得られなかった）、"3042"「欲望・期待・失望」である。これらはどの語も、引用節の内容に対して否定的あるいは肯定的な感情を表すものである。『分類語彙表』の最下位の分類である「段落」を参照して、否定的なもの、肯定的なものごとにとまとめた用例数を表 4 に示す（該当する用例の得られなかった〈はずだ〉〈らしい〉を除く）。

¹² 二乗するのはプラスとマイナスに広がるずれの距離をプラス側に一元化するためであり、期待値で割るのは、期待値の大きさによる値のばらつきを平均化するためである。このように調整することで、例えば【期待値 1000、観測値 992】の場合よりも【期待値 10、観測値 2】の場合にずれの尺度が大きく求められることになる。

¹³ 期待値= $[7340 * \text{該当する分類項目の総用例数} / 7340 * \text{該当する形式の総用例数} / 7340]$

¹⁴ ここでの「尺度 1 以上」という基準に特に根拠はなく、任意に設定したものである。

¹⁵ 最下段の「その他」の値は「上位 15 位」に含めない。

表 3: 思考・感情を表す語の例における期待値と観測値とのずれ

分類項目名	項目番号	のではないか	だろう	かもしれない	はずだ	にちがいない	らしい	ようだ	ほうがいい	なければならぬ	用例数
心	3000	0.5	(+)4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1
感覚	3001	<u>(+)50.0</u>	(-)14.0	0.1	(-)4.5	0.0	(-)1.3	0.2	<u>(-)32.7</u>	(-)10.2	276
感動・興奮	3002	0.0	1.0	0.2	0.1	(+)10.2	0.1	0.0	0.8	(+)3.5	6
感情・気分	3010	0.5	0.7	(+)4.4	0.1	0.1	0.0	0.0	0.6	0.4	4
快・喜び	3011	0.0	(+)1.4	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.2	2
恐れ・怒り・悔しさ	3012	(+)10.0	(-)8.8	(+)10.9	(-)1.2	0.7	0.6	(+)1.5	(-)7.5	(-)2.0	54
安心・焦燥・満足	3013	<u>(+)99.0</u>	<u>(-)30.3</u>	(+)1.2	(-)7.4	(-)4.5	(-)3.5	0.0	<u>(-)45.3</u>	<u>(-)31.2</u>	325
苦悩・悲哀	3014	0.3	1.0	(+)12.9	0.1	0.1	0.1	0.0	0.8	0.6	6
好悪・愛憎	3020	0.0	(+)3.4	0.9	0.2	0.1	0.1	0.1	(-)1.4	1.0	10
敬意・感謝・信頼など	3021	1.0	0.3	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.2	2
表情・態度	3030	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	(+)5.3	0.1	1
信念・努力・忍耐	3040	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	(+)8.5	1
自信・誇り・恥・反省	3041	0.5	0.2	0.6	0.3	(+)3.4	0.2	0.1	(-)2.0	0.1	14
欲望・期待・失望	3042	0.2	(+)1.2	(+)24.7	(-)1.6	0.0	0.8	0.4	(-)6.0	(-)3.2	69
意志	3045	0.3	0.4	0.3	0.2	0.1	0.1	(+)19.9	(-)1.1	(+)2.0	8
道徳	3046	(-)1.5	0.5	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.4	(+)10.2	3
信仰・宗教	3047	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	(+)8.5	1
学習・習慣・記憶	3050	0.1	0.0	0.2	0.1	0.1	0.1	0.0	(+)2.4	0.5	5
知・知識	3060	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1
思考・意見・疑い	3061	0.1	0.0	(-)14.7	0.2	0.1	<u>(-)36.8</u>	(-)18.0	<u>(+)48.3</u>	(-)10.0	4726

分類項目名	項目番号	のではないか	だろう	かもしれない	はずだ	にちがいない	らしい	ようだ	ほうがいい	なければならぬ	用例数
注意・認知・了解	3062	(-)1.6	(-)1.7	(+)2.4	0.3	(+)5.3	<u>(+)286.4</u>	0.1	(-)18.8	(+)3.8	135
測定・計算	3064	0.9	(+)23.6	0.0	0.7	(+)5.8	0.3	0.2	(-)4.3	(-)3.0	31
研究・試験・調査・検査など	3065	0.4	(+)1.1	(+)2.4	0.1	0.1	0.1	0.0	0.8	0.3	6
判断・推測・評価	3066	0.2	(+)20.5	0.0	0.3	(+)13.0	(+)5.0	0.2	(-)15.1	(-)16.5	283
決心・解決・決定・迷い	3067	<u>(-)71.3</u>	(-)11.7	1.0	0.1	0.3	(-)1.8	0.9	(-)20.8	<u>(+)942.2</u>	163
意味・問題・趣旨など	3070	(-)8.0	0.0	0.9	0.5	0.3	(+)2.2	0.1	(-)3.2	<u>(+)86.3</u>	23
論理・証明・偽り・誤り・訂正など	3071	0.1	0.9	0.8	0.6	0.3	0.2	(+)6.9	0.2	0.0	20
説・論・主義	3075	0.9	(-)2.0	0.0	0.4	0.3	0.3	0.1	(-)3.2	(+)3.5	23
原理・規則	3080	(-)4.1	(-)1.3	0.3	0.2	0.1	0.1	0.0	0.0	<u>(+)50.6</u>	8
制度・慣例	3082	1.0	0.3	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	(+)17.0	2
計画・案	3084	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	(+)8.5	1
見る	3091	0.0	1.0	0.2	0.1	0.1	<u>(+)57.2</u>	0.0	0.0	0.6	6
見せる	3092	(+)20.3	(-)3.6	(-)3.1	0.3	(-)1.1	0.9	0.4	(-)9.0	(-)4.0	78
聞く・味わう	3093	(-)14.8	(-)2.5	0.4	0.5	0.7	<u>(+)360.1</u>	(+)1.6	(+)18.3	(-)1.9	53
その他		(-)49.2	(+)29.2	(+)31.5	(+)23.8	1.0	(+)16.0	(+)87.7	0.0	0.0	993
総用例数		3730	1199	293	168	101	80	42	1023	704	7340

表 4: 否定的感情／肯定的感情の別による用例数

	項目	語例	なの のでは か	だ ら う	か も し れ な い	に ち が い な い	よ う だ	ほ う が い い	な ら な い ば な け ら ば
否定的	3012	恐れる・恐怖	44	0	7	0	1	0	2
	3013	心配する・不安だ	293	4	17	0	0	0	0
	3014	嘆く・悲観する	4	0	2	0	0	0	0
	3021	不信感	2	0	0	0	0	0	0
(小計)			343	4	26	0	1	0	2
(割合)			90.0%	14.3%	70.3%	—	—	—	—
肯定的	3013	安心する・安堵する	0	9	0	0	2	0	0
	3042	期待する・希望	38	15	11	1	0	2	2
	(小計)			38	24	11	1	2	2
(割合)			10.0%	85.7%	29.7%	—	—	—	—
合計			381	28	37	1	3	2	4

表 4 からわかるのは、〈のではないか〉〈かもしれない〉において否定的感情を表す語の現れる割合が高く、一方で〈だろう〉においては肯定的感情を表す語との共起例の方が多く、という違いである（〈にちがいない〉〈ようだ〉〈ほうがいい〉の用例も得られたが、割合を問題にできるほどの用例数が得られなかった。強いて言えばどの形式も肯定的感情の語との共起例の方が多く）。これら 3 形式は、肯定的・否定的双方の共起例が認められ、どちらかが非文法的となるわけではないが、片一方と強く結び付いていると判断できる。結び付きが強いと判断されたものが (5) から (7) の例であるが、一方で (8) から (10) のような結び付きも決して非文法的だというわけではない。

- (5) 既婚の友人がパソコンやプリンターを使いに来ることが多いのですが、浮気と誤解されるのではないかと私の母親が心配しています。（Yahoo! 知恵袋）

【〈のではないか〉・否定的】

- (6) そんなとき、好都合にも夫が殺害された。夫を殺す動機があることから疑われるかもしれないと、妻は不安になる。（笹沢左保「水木警部補の敗北」）

【〈かもしれない〉・否定的】

- (7) こうして F 運送会社から百億、M 商事から五十億の手形が松浦の手に渡された。そうして二週間後には換金されるだろうと期待していた。（梁石日「裏と表」）

【〈だろう〉・肯定的】

- (8) 行介が涙を拭いた時、三紗は彼がプロポーズするのではないかと期待を持った。プロポーズされたとしても、それを受け入れる気はなかった。（平岩弓枝「白い序章」）

【〈のではないか〉・肯定的】

- (9) なお、そうなると思いたまわないでほしいが、私どもは、いまの調子でうんとうまくいくと、腸のしめつけがなくなって、鼻の管がとれるようになるかもしれないという希望を持ち始めている。(伊藤栄樹「人は死ねばゴミになる」)

【〈かもしれない〉・肯定的】

- (10) 「コンコルドがもうすぐ見えます。しばらく停車することにします」。乗客の中には急いでいる人もいるだろうと私は心配した。しかし皆は空を眺め、飛行機が姿を見せると一斉に拍手をして歓声をあげた。(土田英生「自家中毒」)

【〈だろう〉・否定的】

これまでのモダリティ研究において、「認識内容について、話し手が好悪どちらの感情を抱くのかによって選択される形式が異なる」という指摘は管見の限り認められない。「話し手の感情」はそこで表されている内容だけを基に判断するのは簡単なことではないが、ここで論じたような主節述部・被修飾名詞を判断基準にすれば、その内容が好ましいのか望ましくないのかを明らかにできる。この点で、本研究の採った方法の利点を生かすことができたと言える。その結果得たデータも、〈のではないか〉〈かもしれない〉と〈だろう〉の間の違いを、かなり明確に示すものとなった。

4.2.3. モダリティ形式と「思考・意見・疑い」との共起

この節では多くの形式において最も多い用例数を得た"3061"「思考・意見・疑い」について取り上げる。ここでも最下位の分類である「段落」を用いて、その用例数および語の種類の高がりについて確認する。

各モダリティ形式と共起する主節述部・被修飾名詞について、表 5 に『分類語彙表』における「体」、すなわち名詞類の用例数を、表 6 に「用」すなわち動詞類の用例を示す¹⁶。なお、"3061"「思考・意見・疑い」に対する「相」つまり形容詞類の分類は『分類語彙表』では設定されていない。共起する語の例は二例ずつ挙げたが、一つしか示されていないものは、該当する例としてその語の例しか得られなかったことを表す。

表 5、表 6 に示したように、名詞類、動詞類ともに〈のではないか〉の用例が多く、なおかつ共起する語の「段落」の種類も最も多い。このような偏りは先に見た表 2 と共通するものである。しかし、やはりこれらのデータにおいても、統計的に特徴的な項目を調査すると〈のではないか〉だけが顕著な値を示すわけではなく、先の表 3 と同様の結果となった。表 7 には名詞類・動詞類をまとめて、表 3 と同様の計算を行った結果を示す。

¹⁶ 段落の番号は動詞類・名詞類で共通していないのでここでは別の表にして示した。なお、動詞類の語例に「意見がある」が挙げられるように、すべての例が「名詞」「動詞」の例だというわけではない。ここでは『分類語彙表』に挙げられているままの分類を用いている。

表 5: “3061”「思考・意見・疑い」の用例【名詞類】

段落	語例	ない のでは か	だ らう	れ か も し な い	は ず だ	い に ち が な い	ら し い	よ う だ	い い ほ う が	な ら な い ば	合 計
01	思い 思惑	15	5	4	1	1				2	28
03	構想 発想	21	5	3	5				2	4	40
04	感想	1									1
05	強迫観念	2								1	3
07	考え 思考	6	7		2				7	7	29
10	発案	1									1
11	意見 見解	43	7				1		12	3	66
13	先入観					1				1	2
16	確信 信念		2		5				2	4	13
17	疑い 疑念	49									49
合計		138	26	7	13	2	1	0	23	22	232

表 6: “3061”「思考・意見・疑い」の用例【動詞類】

段落	語例	ない のでは か	だ らう	れ か も し な い	は ず だ	い に ち が な い	ら し い	よ う だ	い い ほ う が	な ら な い ば	合 計
01	思う	1805	635	101	64	42	4	4	781	259	3695
02	念頭に置く 思い込む	1		1					1		3
03	思い付く	5	1								6
06	考える 思案する	409	91	24	17	10	1		31	103	686
08	考え直す 思い巡らす		3	2			1		1	1	8
11	意見がある	16									16
12	確信する 思い込む	4	11		10	9	1			1	36
13	疑う 恐れがある	42		1				1			44
合計		2282	741	129	91	61	7	5	814	364	4494

表 7: 「思考・意見・疑い」における、期待値と観測値とのずれの度合い

段落	語例	ない のでは か	だ らう	れ か も し な い	は ず だ	い に ち が な い	ら し い	よ う だ	い い ほ う が	な ら な い ば	用 例 数
01	思い 思惑	0.0	0.0	(+)7.4	0.2	1.0	0.3	0.2	(-)3.9	0.2	28
03	構想 発想	0.0	0.4	(+)1.2	<u>(+)18.2</u>	0.6	0.4	0.2	(-)2.3	0.0	40
04	感想	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1
05	強迫観念	0.1	0.5	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.4	(+)1.8	3
07	考え 思考	(-)5.2	(+)1.1	(-)1.2	(+)2.7	0.4	0.3	0.2	(+)2.2	(+)6.4	29
10	発案	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1
11	意見 見解	(+)2.7	(-)1.3	(-)2.6	(-)1.5	0.9	0.1	0.4	0.9	(-)1.8	66
13	先入観	(-)1.0	0.3	0.1	0.0	<u>(+)34.4</u>	0.0	0.0	0.3	(+)3.4	2

段落	語例	ない のでは か	だ らう	れ か も し ない	は ず だ	い に ち が ない	ら しい	よ う だ	い い ほう が	な ら な け ら ば ない	用例 数
16	確信 信念	(-)6.6	0.0	0.5	<u>(+)74.3</u>	0.2	0.1	0.1	0.0	(+)6.1	13
17	疑い 疑念	<u>(+)23.3</u>	(-)8.0	(-)2.0	(-)1.1	0.7	0.5	0.3	(-)6.8	(-)4.7	49
01	思う	(-)2.8	(+)1.6	<u>(-)14.7</u>	(-)5.0	(-)1.5	<u>(-)32.7</u>	<u>(-)13.9</u>	<u>(+)137.4</u>	<u>(-)25.7</u>	3695
02	念頭に置 く 思い込む	0.2	0.5	(+)6.5	0.1	0.0	0.0	0.0	0.8	0.3	3
03	思い付く	(+)1.2	0.0	0.2	0.1	0.1	0.1	0.0	0.8	0.6	6
06	考える 思案する	(+)10.5	(-)4.0	0.4	0.1	0.0	(-)5.6	(-)3.9	<u>(-)43.7</u>	<u>(+)21.0</u>	686
08	考え直す 思い巡ら す	(-)4.1	(+)2.2	(+)8.8	0.2	0.1	(+)9.6	0.0	0.0	0.1	8
11	意見があ る	(+)7.6	(-)2.6	0.6	0.4	0.2	0.2	0.1	(-)2.2	(-)1.5	16
12	確信する 思い込む	<u>(-)11.2</u>	(+)4.5	(-)1.4	<u>(+)102.2</u>	<u>(+)146.0</u>	0.9	0.2	(-)5.0	(-)1.7	36
13	疑う 恐れが ある	<u>(+)17.3</u>	(-)7.2	0.3	(-)1.0	0.6	0.5	(+)2.2	(-)6.1	(-)4.2	44
--	"3061" 以外全て	0.3	0.1	(+)26.6	0.3	0.1	(+)66.4	(+)32.5	(-)87.3	(+)18.1	2614
全用例数		3730	1199	293	168	101	80	42	1023	704	7340

表 7 からは、表 5、表 6 中、最も大きな用例数となる動詞類"01"の段落 (すなわち「思う」) と〈のではないか〉の共起例 (例 (11) - (13)) も、統計的には特に偏った結果ではないことがわかる。もちろんこれは、「意味が無い共起例」であることを表すのではない。コーパスにおいて最も高い頻度で現れるということは、「用いられやすさ」という点では最も顕著な共起例だと考えることができる。

(11) これらを古い製品と入れ替えるだけでも火災対策の前進につながる。ある程度の強制も含め、国が指導して推し進める必要があるのではないかと思う。
(野口昌之「家長の地震考」)

(12) 「十二月十七日の航空券を押さえてある」とぼくは言った。

「わたしの誕生日？」

「なんとなく縁起がいいんじゃないかと思ってさ」

彼女は微笑み、弱々しい声で「ありがとう」と言った。(片山恭一「世界の中心で、愛をさけぶ」)

- (13) 「わかってくれ...あの子はヒステリー状態だった。実際、あの日の彼女を見たときは、二度と正気に戻らないんじゃないかと思ったくらいだ」彼はかぶりを振り、ため息をついた。 (平江まゆみ「スウィート・ベイビー」)

さてこの「思う」との共起例において、〈のではないか〉とは異なり、統計的に顕著な値を示す形式が存在する。次のような〈ほうがいい〉と「思う」の共起は特に顕著な値であることが表 7 には表されている。

- (14) 「どうかしたのかい」
山上が問い返すと、「私たち、いまはなんの不安もないけれど、人生、一寸先は闇と言うでしょう。将来の保障を考えておいた方がいいとおもうんだけど」
山上は茜の言葉の含む意味がつかめなかった。 (森村誠一「マリッジ」)
- (15) したがって、私は、これらについても、押出しファイリングに入れて、「ポケット一つ原則」を貫くほうがよいと思う。ただし、封筒の色で区別する。要返信などの「すぐやるファイル」は、赤い封筒に入れて、頻繁にチェックする。これは、すぐに習慣になる。 (野口悠紀雄「超」整理法)

ここでさらに用例を確認すると、この結果には特定のコーパスジャンルが関係していることが明らかになった。というのも、〈ほうがいい〉と「思う」の共起例は、下に示すような Yahoo!知恵袋の用例が 664 例と突出しており、国会会議録での 30 例、書籍・白書の 87 例と比べ非常に多くなっているからである。これは、〈なければならぬ〉と「思う」の共起例が国会会議録では 188 例ある一方で、書籍・白書では 58 例、さらに Yahoo!知恵袋では 13 例に過ぎないという結果と非常に対照的な数値である。

- (16) (立ちくらしがひどい、という相談で) 脳の病気や耳の病気でも生じます。さまざまな病気が考えられますので精密検査を受けた方が良いでしょう。
(Yahoo!知恵袋)
- (17) (俳優になるための方法に回答して) 劇団には養成所があるところも多いですから、そこで演技について学ぶのが良いでしょう。俳優といっても、舞台、テレビ、映画などいろいろ活躍の場があるわけで、自分がどんな俳優になりたいのかによって、所属する劇団を選んだ方が良いでしょう。
(Yahoo!知恵袋)
- (18) (質問：) 薬を飲んだ 3 時間くらい後に、嘔吐したんですが、薬飲んだ意味なくなってしまうんですか？
(回答：) (略) でも、飲んだお薬が胃薬でないのなら、今飲んでも胃に負担を掛けるだけなので指示通りの間隔を守った方が良いでしょう。
(Yahoo!知恵袋)

Yahoo!知恵袋は、投稿者の設定した質問に対して回答者が案を述べる形になってい

るが、基本的には質問者も回答者も一般の読者である。その結果、回答も、当該の分野の第一人者が回答するというよりも、似たような経験を持つ人間からの、アドバイスとしての回答が多くなるようである。アドバイスとして、ということから、「～しなさい。」や「～ほうがいい。」と断言する表現よりも、あくまで個人的感想であることを「と思う」を付け加えて表すことが多くなるのではないかと考えられる。

この説明はあくまで解釈の一つに過ぎないが、〈ほうがいい〉と「思う」の共起の度合いの強さに Yahoo!知恵袋の用例が大きな影響を与えていることは間違いない。今回、他の項目ではジャンル別の傾向などは確認していないが、共起の組み合わせによっては、特定のジャンルに出現が偏るということは十分予想される。またこれは、必ずしもモダリティ形式と主節述部が共起する場合だけではなく、モダリティ形式の出現全体においても、考慮すべき問題かと思われる。ただ、本研究の主目的からは外れるので、詳細は他の機会に譲りたい。

次に、「証拠性」の〈らしい〉〈ようだ〉と「思う」の共起について確認する。表 7 において (-) が付き、期待値とのずれも上位 15 項目に入っていることから、この 2 つの形式と「思う」の共起例は他に比べて顕著に少ないと言える。統計的な分析に加えて、引用節内に出現する全用例数に占める、「思う」との共起例の割合を見てもその点は明らかである。

表 8: 全用例に対する「思う」との共起例の割合

	な の い で か は	だ ろ う	れ か な い し	は ず だ	い に ち が い	ら し い	よ う だ	い う が い い	な ら な け ら ば	用 例 数
「思う」と の共起例	1805	635	101	64	42	<u>4</u>	<u>4</u>	781	259	3695
全体例	3730	1199	293	168	101	80	42	1023	704	7340
割合	48.4%	53.0%	34.5%	38.1%	41.6%	<u>5.0%</u>	<u>9.5%</u>	76.3%	36.8%	100.0%

既に表 1 において、〈らしい〉〈ようだ〉は全体的に見ても用例数が少ないことを確認したが、この結果には特に「思う」との共起例が少ないことが影響していると考えられる。

〈らしい〉〈ようだ〉など「証拠性」を表す形式については、宮崎 (2002: 144) が例と共に、次のような説明を加えている。

〈可能性・必然性〉と〈証拠性〉の対立の基本は、話し手の内的思考による認識であるか、外的状況の観察に基づいた認識であるか、ということにある。純粋に話し手の内的思考として文を述べることができるか否かということは、仮定条件の帰結として使用できるか否か、「と思う」による思考内容化が可能か否か、というテストによって確認できる。

(59) 雨がひどいので、試合は中止に{なるかもしれない／なるにちがいない／?なるはずだ／*なるようだ／*なるみたいだ／*なるらしい／*なりそうだ／*なるそうだ}と思う。

(宮崎 2002: 144 例番号・文法性判断は宮崎 (2002) による)

宮崎 (2002) の文法性判断は、「と思う」のように、発話時時点の話し手の判断を表す場合のことを述べており、必ずしもすべての「思考内容化」を除外しているわけではない。実際に、次のように発話時時点の判断を表していない例であれば、使用例が認められる。

- (19) 石津は、飛び出して来たのが、もうかなり年輩で、おそらくは六十歳を過ぎているらしいと思ったが、その手に、光った刃物が握られているのを見て、ギョッとした。(赤川次郎「三毛猫ホームズの騒霊騒動」)
- (20) 村井氏は、大仰な身ぶりを混えて話した。(中略) また躁状態に入ったようだ、と私は思った。(内海隆一郎「蟹の町」)

しかしながら、〈らしい〉〈ようだ〉が、「(話し手が) ～と思う」という形の引用節で用いられた例は今回の調査でも得られなかった。「思う」との共起例の少なさは、「発話時時点の話し手の判断」を表す「思う」などと共起しにくいという点に求めることができる。

「思考・意見・疑い」に該当する語のほとんどは、「意見」「発想」や「思う」「考える」のように、思考内容がどのようなものであるかをあまり限定せずに表現する語であった。しかし、「思考・意見・疑い」内には、その意味では他と異なる語群が存在する。項目名にもある「疑い」を表すものである。「思考・意見・疑い」の下位にある段落を確認すると、「疑い」や「疑う」を含むのは名詞における"17"、動詞における"13"の段落である。先の表 7 に示したように、この二つの段落と共起するもので、用例数が期待値よりも多く、特徴的だと言えるのは〈のではないか〉のみであった。実際、該当する用例を抽出すると、〈のではないか〉においては名詞の「疑い」「疑心暗鬼」「疑念」「疑問」「疑惑」「半信半疑」「猜疑心」、動詞の「勘ぐる」「疑う」「恐れがある」と、異なり語数で 10 語、延べで 91 例の共起例が認められるのに対し、他に得られたのは〈かもしれない〉における「疑う」との共起例 1 例のみという偏りが認められた。

- (21) あなたがこの本をつまみ食的に読むなら、もしかしたら本当に著者が言いたいことは理解できていないのではないかと、という疑念に悩まされることになる。(山田祐輔「逆 18 禁」)
- (22) 初め、野々宮が何かを企んで出鱈目を言っているのではないかと疑ったが、それなら彼が自分と森本の間を知っているわけがない。(深谷忠記「指宿・桜島殺人ライン」)
- (23) 内容によって違いはありますが、身近な対象者ならどこまで気付いているのかに留意しましょう。
- ・探られているかも知れない、と疑っている段階か
 - ・探偵らしき人が探っている、とわかってしまったか
 - ・依頼主までわかってしまったか (児玉道尚「探偵社・興信所の選び方と頼み方」)

この点に関しては、既に先行研究で「「～ト疑ウ」の場合、最も頻ばんに引用句内部に出てくるのが「～デハナイカ」という文末形式である(藤田 2000: 244)」という指摘があるが、今回の調査で、「疑う」に限らず、類似した意味で用いられる語と共起するモダリティ形式は専ら〈のではないか〉に偏ることが実証できた。

4.2.4. 〈らしい〉と「聞く」の共起

「認識のモダリティ」の諸形式の内、表 3 で〈のではないか〉以外に顕著な値を示す箇所が多いのは〈らしい〉であった。ここでは〈らしい〉について取り上げる。

表 3 からは、〈らしい〉に特徴的な結果の一つとして〈らしい〉と"3093"「聞く・味わう」との共起例が挙げられることがわかる。表で (+) を付したように、この共起において、期待値よりも実際に得られた用例数はかなり多い。以下に実際の例を挙げる。

- (24) 彼が死んでから、刑事さんに、森さんは、あなたと結婚したいと思っていたらしいときいて、なんで、それを生きてる間にいってくれなかったのかと思ったくらいよ。(山村美紗「失恋地帯」)
- (25) 嵐龍三郎先生がまんぼう塾をやめようかと思っていると聞いて、誠は田中先生が学校をやめるらしいと聞いたときの百倍もおどろいた。(斉藤洋「まんぼう塾物語」)
- (26) 「手術で、ある程度治るんですよね？」
「ええ。当たり外れはあるみたいですが、手術するだけの価値はあるみたいですね。まったく普通の状態に復帰した事例も多々あります。最初、手術で治るらしいと聞いた時には、夫婦して小躍りして喜びましたよ。(大石英司「新世紀日米大戦」)

〈らしい〉と共起する"3093"「聞く・味わう」の例は全てが「聞く」の例であった¹⁷。「出席者の話によれば、会は無事に済んだらしい」などの、「伝聞用法¹⁸」を〈らしい〉が持っていることを考えると、同じく伝聞したことを表す「聞く」と〈らしい〉との共起は極めて自然な結果のようにも思われる。しかしながら、もし〈らしい〉が他者からの伝聞を表し、それと共起する「聞く」も同様の伝聞を表すのだとすると、どちらかが余剰なものになるはずである。その場合には、以下に図示するように、〈らしい〉だけ、あるいは「と聞く」のどちらかを用いるだけで表現できるからである。図では太い矢印で「伝聞」が発生したタイミングを、細い点線の矢印でどの「伝聞」を言語化しているのかを示した。

¹⁷ ここで論じる「聞く」には、「尋ねる」という意味での「聞く」は含めていない。「聞く」は『分類語彙表』でも多義語として扱われているため、文脈上「尋ねる」の意味だと判断できるものは"3132"「問答」の例として扱っている。

¹⁸ 日本語記述文法研究会(2003)などは、「電源が入らない。壊れたらしい」のような「推定」とこの「伝聞」は、「どのような証拠に基づくか」の点だけが異なるものであるため、統一的に扱えると論じている。

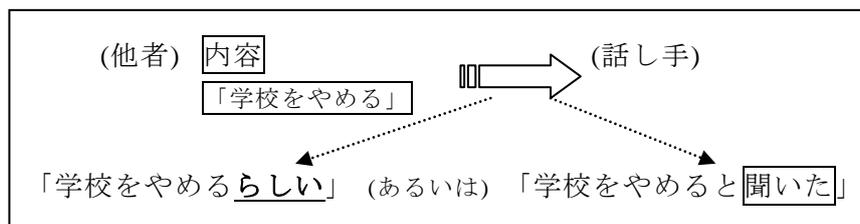


図 1: 「学校をやめる」と伝聞した場合

従って、(24) から (26) の例は、話し手が伝聞した内容がそもそも「～らしい」を含むものであったことを表していることになる。つまり、話し手にその内容を伝えた人間にとってもまた、その内容は別の人間から聞いた伝聞内容であった、という解釈になる¹⁹。

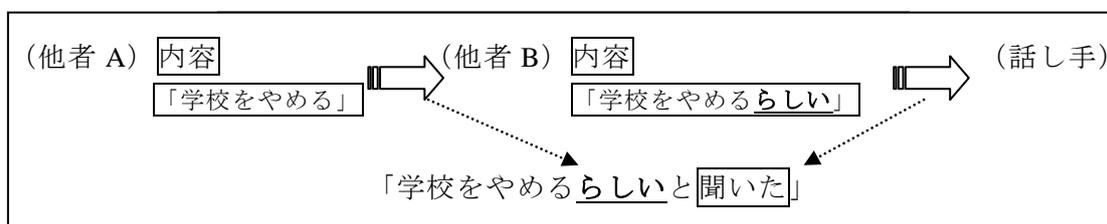


図 2: 「学校をやめるらしい」と伝聞した場合

上の例は、文字通り解釈するのならば全て図 2 と同じような状況を言語化したものであるはずだということになる。しかしながら、図に示したように、〈らしい〉と、「聞く」が言語化する「伝聞」がそれぞれ異なるタイミングの（つまり発話者が異なる）ものを表しているのであれば、〈らしい〉と「聞く」の間に直接の関係は成立しないことになる（他者 B が他者 A から何かを聞いたことが、話し手が他者 B から何かを聞くという事態に影響を与えるとは考えられないからである）。となると、〈らしい〉と「聞く」の共起が顕著に発生していることを説明することができない。

さて、次のような例での伝聞はどのようになっているだろうか。

- (27) (髪を乾かす時間についての返答) 私も肩くらいの長さで、乾かす時間はだいたい 3～5 分くらいでしょうか。私の場合は、先に根元を乾かしてから、その後に毛先の方を乾かします。そのほうが髪に良いらしいと聞いたので。
(Yahoo!知恵袋)
- (28) 子供がカブトムシの幼虫をもらってきました。かなりデカイ幼虫なのですが幅 28 センチ奥行き 15.5 センチの水槽に 5 匹入れています。もっと広い水槽を買った方がいいのでしょうか？ 共食いをするらしいと聞いてちょっと心配になってきました。
(Yahoo!知恵袋)

¹⁹ ここでは図でいう「他者 B」が述べる内容を伝聞したのではなく、他の証拠に基づいて「推定」した、という解釈も成立するはずであるが、ここでは考慮しないでおく（実際、上に示した例の中でも、たとえば例 (27) では、「森さん」が死んでいるという文脈があるため「伝聞」よりも「推定」の解釈が優先されるだろう）。

- (29) (手の爪の白い線について) 空気が入るとなるらしいとは聞いたことがあります。何らかの病気とか、体が弱っているとなるときもあるらしいです。私も子供の頃、手の指全部がそうだったことがありました。(Yahoo!知恵袋)

これらの例では話し手が聞いた内容が「髪に良いらしい」「共食いをするらしい」「空気が入るとなるらしい」であったことが必ずしも必須条件とはなっていないようである。特に最後の例では、後続の文では「らしいと聞く」ではなく「らしいです」だけで文が終わっており、どちらも実は単一の「伝聞」を表している可能性が高い。つまり、次の図に示すように、同じ発話者から伝聞したという内容が、〈らしい〉と「聞く」の両方で表されているという解釈である。

例文を見ると、こういった解釈は上に見たような Yahoo!知恵袋からの用例でのみ可能だと思われ、これが話し言葉における用い方の現れである可能性もある。ただ、用例が現時点では充分には集まっていないため、実際の話し言葉の確認なども含め、詳細については今後の課題としたい。従って、下の図に示すような状況は、現時点ではその可能性を指摘するにとどめる。

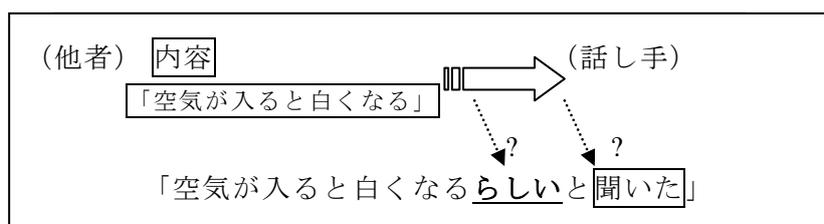


図 3: 単一の伝聞が〈らしい〉と「聞く」によって言語化される場合

4.2.5. 〈らしい〉と「注意・認知・了解」の共起

引き続き、この節でも〈らしい〉に認められた特徴を論じる。

"3062"「注意・認知・了解」は、表 2 に示した用例数の分布からはやはり〈のではないか〉との共起例が最も多いのだが、表 3 では、統計的に顕著なのはむしろ〈らしい〉との共起例だという結果になっている。つまり、〈らしい〉においては、予想されるよりもかなり高い度合いで「注意・認知・了解」に当たる語との共起が認められたわけである。この結果に基づき、「注意・認知・了解」が共起する例を確認すると、次のような〈らしい〉と「わかる」の共起が特徴的であることがわかる。

- (30) 食事はバイキングのシステムで、洋酒のメーカーがスポンサーになっているらしいとわかった。(阿刀田高「Vの悲劇」)
- (31) 栗子は呆れて両親を見ていた。もはや、誰が悪いとか、どこに責任があるとか、そういう問題ではなくなっているらしい、ということだけは分かった。(乃南アサ「パラダイス・サーティーン」)

他の形式も含め、「わかる」との共起数を見ると次のような結果となる。〈らしい〉の「注意・認知・了解」との共起例 22 例のうち 15 例が「わかる」との共起である。

表 9: 「わかる」の用例数と割合

	ない のでは か	だ らう	れ か も し	は ず だ	い に ち が	ら し い	よ う だ	い ほ う が	な ら な い ば	な け れ ば な ら な い	合 計
「わかる」	1	8	1	1	0	15	1	0	1	28	
"3062"全体	58	16	9	4	5	22	1	0	20	135	
「わかる」 の割合	1.7%	50.0%	11.1%	25.0%	0.0%	68.2%	100.0%	--	5.0%	20.7%	

〈らしい〉は「認識のモダリティ」の中でも「証拠性」を表す形式である。つまり、〈らしい〉を用いた場合、話し手の認識は単なる想像によってではなく何らかの証拠に基づいた判断であることが表されるわけである。外部に何らかの証拠がある分、話し手にとってのその判断は確実性が高いもの（つまり、「わかる」と言えるほどの判断）として捉えられるために、〈らしい〉と「わかる」の共起が特徴的な結果となる、と説明することができるかもしれない。

ただ、同じ「証拠性」を表すにもかかわらず〈ようだ〉と「わかる」の共起は、表 2、表 3 どちらにおいても取り立てて目立つ結果とはなっていない。また、〈らしい〉がそれ以外の形式に比べて「話し手の確信度が高いことを表す」と判断できるようなその他の現象も特に認められない。従って現時点では〈らしい〉と「わかる」の共起について確実な理由を設定することができない。ここではその現象の指摘にとどめ、理由についてはまた今後考察することにした。

4.2.6. 〈なければならぬ〉と「決心・解決・決定・迷い」との共起

表 3 におけるカイ二乗値で最も大きな値は、次のような〈なければならぬ〉と"3067"「決心・解決・決定・迷い」の共起例である（これは期待値よりも実際に得られた用例数が多かったものである）。他の形式との共起例がほとんど無い中で〈なければならぬ〉とだけ 137 例共起していたことがこの結果をもたらしている。「決心・解決・決定・迷い」にあたる語の内、特に〈なければならぬ〉との共起例が多く見られたのは次のような例である。

- (32) 第八条「透明性の確保」は「個人情報の取扱いに当たっては、本人が適切に関与し得るよう配慮されなければならない」と規定している。（櫻井よしこ「日本の論点」）
- (33) 憲法 24 条 1 項は、「婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。」と定めています。（本橋美智子「Q&A これ心安心高齢者の財産管理」）

これらの例では、〈なければならぬ〉が話し手の心的態度を表さず、「客観世界の秩序、しくみ、事情などのあり方として（高梨（2002: 94））」事態の必要性を述べるのに用いられている。このような用法は、「{規則では／法律では}～なければならない。」

などの表現の他に、上の例のような主節述部を用いることによっても明示されうる。〈なければならない〉における「決心・解決・決定・迷い」の多用には、話し手からの要請としてではなく、それが客観的必要性に基づいて求められていることを明示するために用いられることが影響しているものと考えられることができる。

一方、〈ほうがいい〉には客観的必要性を表す用法は無い(宮崎他 2002: 96)。「決心・解決・決定・迷い」と〈ほうがいい〉の共起例が「～ほうがいいという結論」という、規定・規則と関連しない語との共起例 1 例のみであった点に、〈なければならない〉〈ほうがいい〉間の違いが現れていると考えられる。

以上、本節では、引用節内のモダリティ形式の違いが、思考・感情に関わる主節述部・名詞との共起しやすさ、しにくさに影響を与えていると判断できる例を確認した。

4.3. 表現に関わる述部・名詞の用例分析

次に、主節述部・名詞が、表現に関わるものの用例について考察する。表 10 に、該当する用例数を示す。表 11 には期待値と観測値とのずれをまとめた。

本節で扱う主節述部・名詞は、モダリティ形式の意味を直接反映してはいないように思われる例も多い。例えば、全形式に共通して認められる"3100"「言語活動」の中で最も多く用いられていた「言う」は、単に発話を行うことを表すだけである。各モダリティ形式も言語形式の一つである以上、それらを用いた引用節と、「言う」などの語との間の共起しやすさ・しにくさに、何らかの意味的理由が設定できるとは考えにくい²⁰。一方で、表現の様態・機能を細分化して表す語が用いられた場合には、各モダリティ形式との共起のしやすさに、モダリティ形式の意味が影響をあたえる場合も考えられる。本節では、モダリティ形式の意味が影響を与えると思われる用例について確認する。

²⁰ 従って、表 11 の"3100"にみられるような統計的分析結果の違いは、各モダリティ形式の意味が積極的に関与した結果ではなく、「言う」などよりもより細かい意味を表し分ける表現との共起が多ければ、「言う」などとの共起が相対的に少なくなる、逆に意味を細かく表す語とあまり共起しなければ相対的に「言う」などとの共起頻度が高くなる、という関係にあるものだと考えられる。

表 10: 表現を表す主節述部・名詞の用例数

項目分類 項目名	項目 番号	語例	ない のでは か	だ らう	か も し ない	に ち が い ない	は ず だ	ら しい	よ う だ	ほ う が い い	な ら な い ば な け れ ば
言語活動	3100	言う・発言する	181	142	44	5	30	11	13	94	36
表現	3103	表明する・表現	2								2
叙述	3104	述べる・記述する	4	10	3	1	4		1	3	6
通信	3122	送る・メール								2	
伝達・報知	3123	噂する・報告	18	5	8	2		8	3		1
話・談話	3131	話す・語る	24	18	7		1	3	3	8	3
問答	3132	質問する・尋ねる	45	16	5		2	1	1	8	3
会議・論議	3133	議論・反論する	21	1			1		1		3
言論	3134	論じる	3								
批評・弁解	3135	批判する・非難する	22				1				
説明	3136	説明する・説く	2	2			1		1		2
宣告・宣言 ・発表	3140	言い聞かせる・宣告する		2						1	4
報告・申告	3141	提案する・証言	7	1			3		1	2	
評判	3142	風評		1							
読み	3150	読む						1		1	
書き	3151	書く・ある	1	7	2	1	1	1	2	4	24
文章	3154	記事・条文	2						1		1
合計			332	205	69	9	44	25	27	123	85

表 11: 表現を表す語の例における期待値と観測値とのずれ

項目名 分類	番号目	語例	ないで かは	だ らう	れか も ないし	はず だ	いに ちが ない	ら しい	よ うだ	い ほう が いい	な ら な い ば な け ら ば	用 例 数
言語活動	3100	言う・発言する	<u>(-)36.5</u>	<u>(+)28.8</u>	<u>(+)21.4</u>	(-)4.7	<u>(+)65.3</u>	(+)4.0	<u>(+)30.3</u>	(+)3.5	(-)5.6	556
表現	3103	表明する・表現	0.0	0.7	0.2	0.1	0.1	0.0	0.0	0.6	(+)6.8	4
叙述	3104	述べる・記述する	(-)9.2	(+)4.4	(+)2.3	0.1	<u>(+)28.8</u>	0.3	(+)3.6	0.5	(+)2.8	32
通信	3122	送る・メール	1.0	0.3	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	(+)10.6	0.2	2
伝達・報知	3123	噂する・報告	1.0	0.8	<u>(+)21.4</u>	0.9	0.6	<u>(+)115.0</u>	<u>(+)29.2</u>	(-)6.3	(-)2.5	45
話・談話	3131	話す・語る	(-)3.0	(+)4.5	(+)7.0	(-)1.5	0.0	(+)7.1	(+)17.9	0.2	(-)1.8	67
問答	3132	質問する・尋ねる	0.4	0.6	1.0	(-)1.9	0.7	0.0	0.6	1.0	(-)2.9	81
会議・論議	3133	議論・反論する	(+)3.9	(-)2.6	(-)1.1	0.6	(+)1.1	0.3	(+)4.6	(-)3.8	0.1	27
言論	3134	論じる	1.4	0.5	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.4	0.3	3
批評・弁解	3135	批判する・非難する	(+)9.1	(-)3.8	0.9	0.5	(+)1.5	0.3	0.1	(-)3.2	(-)2.2	23
説明	3136	説明する・説く	1.0	0.4	0.3	0.2	(+)7.2	0.1	<u>(+)19.9</u>	(-)1.1	(+)2.0	8
宣告・宣言・発表	3140	言い聞かせる・宣告する	(-)3.6	0.6	0.3	0.2	0.1	0.1	0.0	0.0	(+)16.5	7
報告・申告	3141	提案する・証言	0.0	0.7	0.6	0.3	<u>(+)40.9</u>	0.2	(+)10.6	0.0	(-)1.3	14
評判	3142	風評	0.5	(+)4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1
読み	3150	読む	1.0	0.3	0.1	0.0	0.0	<u>(+)43.9</u>	0.0	(+)1.9	0.2	2
書き	3151	書く・ある	<u>(-)19.9</u>	0.0	0.0	0.0	0.3	0.6	(+)12.5	0.7	<u>(+)95.8</u>	43
文章	3154	記事・条文	0.0	0.7	0.2	0.1	0.1	0.0	<u>(+)41.7</u>	0.6	1.0	4
		その他	(+)5.6	(-)2.9	(-)4.1	1.0	(-)11.1	(-)3.2	(-)12.9	0.0	0.0	6421
		全用例数	3730	1199	293	168	101	80	42	1023	704	7340

まず、「3132」の「問答」の例を確認する。「問答」全体では特定のモダリティ形式との顕著な関係性は読み取れないが、その内部ではかなり偏りが認められた。「問答」の各語を、聞き手へ質問する意味のもの（"02~04"）と、返答を意味するもの（"05"以降）の段落別に分け²¹、それぞれの用例数を示す。

表 12: "3132"「問答」中の段落別用例数

	なの いで かは	だ ろ う	れ か な い し	は ず だ	い に ち が い	ら し い	よ う だ	ほ う が い い	な ら な け ら な い ば
質問類 ("02-04"の段落)	33	3	2	0	0	0	0	0	1
返答類 ("05-"の段落)	11	13	3	2	0	1	1	8	2
合計	44	16	5	2	0	1	1	8	3

表に見られるように、ほとんどの形式において (34) のように返答を意味するものが多数を占めるのに対し、〈のではないか〉においては返答を意味する (35) のような例よりも、(36) など質問の類の用例の方が多い。割合は小さいが、〈だろう〉においても、(37) など、質問類の語との共起例が認められる²²。

- (34) 外国産のカブトの♂と日本産のカブトの♀との間に子どもは誕生しますか？と質問した者です。生まれるらしいとの回答を得たのですが、その場合はお父さん似？お母さん似？ (Yahoo!知恵袋) 【返答】
- (35) 友人代表として弔辞を読むようにといわれたとき、ぼくが読んで、舟橋君が化けて出てくるのではないかと答えたが、だから是非私に読んでほしいという今日出海君の希望であったと聞いた。(丸谷才一・丹羽文雄「友を偲ぶ」) 【返答】
- (36) それで、中元の時季に、野沢とトラブルがあったのではないかと質問したのですが、まったく覚えがないという答えでした。(佐野洋「殺人買います」) 【質問】
- (37) その子の友達に「彼モテるでしょう？」と尋ねると、全然モテないしチョコをくれる女の子もいないそうです。(Yahoo!知恵袋) 【質問】

先行研究において、〈のではないか〉に聞き手からの情報を求める用法があり、〈だろう〉に「確認要求」の用法があることが指摘されている。上の表に示した、「問答」に関わる主

²¹ "01"の段落は、「自問自答する」という、双方向性のある語で、〈のではないか〉のみに認められた。

²² 他に、〈かもしれない〉〈なければならぬ〉にも質問を意味するものとの共起例が認められたが、次の例のように、その形式の使用だけで質問を表せるとは考えにくいものであった。この例は、「さわったかもしれない(のか?)」という意味で、上昇調などが併用される環境だと思われる。

さらにまた飯野源治証人は、つづいて「その後あなたが現場に行ってから第九の写真を撮るまでの間に警察官はだれも時計にさわっていませんか」と中田弁護人に問われて、「私はさわっていませんが、だれもさわっていないとは断言できかねます。確認の意味もありますから」と答え、「さわったかもしれない」とついで問われて、「はい」と答えるのである。(野間宏「狭山裁判」)

節述部・名詞の現れ方の違いによっても、「認識のモダリティ」に該当する形式の内〈のではないか〉〈だろう〉だけに「質問」系統の機能があることが確認された。

次に、「3135」の「批評・弁解」について確認する。コーパスからは〈はずだ〉の1例を除き〈のではないか〉の例のみが得られた。

- (38) 西ドイツのシュミット前首相が、いつか、「(中略) 戦後の日本はアメリカに頼るばかりで、西ドイツが払ったような努力を、周辺の諸国に対して払ってこなかったのではないかと、批判していたのを思い起こす。(井出孫六「歴史に学ぶ」)
- (39) 「今日、後輩が照明オペレーターとしてデビューするステージがあるんです。それを見てやろうと思って…」
インスは、突然ソウルに来たことを弁明しているように聞こえるのではないかと語尾を濁らせた。(吉野ひろみ「四月の雪」)

この内、「弁解」側の語と〈のではないか〉が共起しているのは「語尾を濁らせる (39)」のみであり、他の21例は「批判する」「非難する」といった、受け手への否定的態度を伴う語との共起例であった。前節で確認したように、〈のではないか〉は特に否定的感情を伴う述部・名詞との共起が多い形式であったが、「批評・弁解」における〈のではないか〉の多用にも、その性質が影響していることが見て取れる。

"3122"の「通信」や"3150"以降の「読み」「書き」「文章」に分類される例は、表現に際してどのような手段を用いるかを限定するものであり、「言う」の場合と同様、引用節の内容が持つ意味との関連性は薄いと考えられる。その中で、表11に示したように、〈なければならぬ〉では、「3151」「書き」に該当するものと共起する例が統計的に特徴的であると言え、用例数も85例中24例と、「3100」「言語活動」の36例に次ぐものとなっている。他形式に比べ特徴的なこの結果は、〈なければならぬ〉の意味を反映したものと捉えられる。

- (40) 「白書」の冒頭の「総論」では、(中略)「それゆえ、当面の景気の本格回復はこれまでの経済構造やシステムを改編し、日本経済の足腰を強化することによって達成しなければならない」とはっきり書かれている。(山家悠紀夫「偽りの危機本物の危機」)
- (41) 第八条についてお聞きしたいのですが、第二項、資産再評価を行った事業用土地について商法三十四条第二号の規定により帳簿価額の減額をした場合は取り崩さなければならないとありますが、商法第三十四条第二号の規定により帳簿価額の減額をした場合というのはどういう場合を想定しているのでしょうか。(衆議院142回；法務委員会)

〈なければならぬ〉においては、(40)(41)などのように、「法律・制度として記載され

ている・定まっている」という意味で「書き」にあたる語が共起していた。この点は、その他の形式と「書き」の共起例が、(42)のように単なる書記を意味するものが殆どである点と、対照的である。

- (42) 先の論文のなかで清水氏は「日本のマスコミのなかに一人でも、日本の血友病患者は大丈夫なのかという疑問を抱き、調査するものがいたならば、状況はまったく変わっていたはずだ」と書いているが、その点は、ちょっと違う。(柴田鉄治「科学事件」)

「書き」類と〈なければならぬ〉の共起例の多さは、前節で指摘した〈なければならぬ〉と「規定」類の表現との共起しやすさと連続的に捉えるべきものと考えられる。

以上、表現に関わる述部・名詞との共起例においても、引用節内のモダリティ形式の意味が共起しやすさ(あるいはしにくさ)に影響する可能性があることを確認した。

5. 本研究のまとめ

本研究では、モダリティ形式が引用節に現れる用例について、共起する主節述部・被修飾名詞の種類、またそれぞれの共起例数の分布に、各モダリティ形式の意味の違いが反映されることを論じた。本研究の特徴は、モダリティ形式の意味を論じるにあたり、その形式と共起する語の意味を判断基準とするという点である。「意味」の判断に『分類語彙表』の分類を利用し、考察の元となる用例データを、コーパスから収集したことも特徴となっている。

コーパスからの用例を用いることで事例に即した解釈ができるのはもちろん、大量の用例を分析の対象とすることで、その共起が起こるか起こらないか(その共起が自然か否か)という点だけではなく、どういった共起が他に比べて起こりやすいのか、というデータを用いて考察を行えた。その際、4.2.1で説明したような、統計的分析(カイ二乗値の多寡)に基づいて、どういった共起が特徴的なのかを見極めて論じた点も、先行研究には無かった観点である。

4.2.2節で見た〈のではないか〉〈かもしれない〉と〈だろう〉の間での、「話し手の感情(好悪)」による形式の選択傾向などは、どの形式とも自然に共起できる語の間にも、明確な傾向の違いが存在するという点を指摘したものとして、上の利点を活かした指摘が行えたものだと言える。また、4.2.3節で見た「思考・意見・疑い」の語との共起においては、先行研究の意味に基づく考察に対して、その客観的データを示すことができた箇所が多くあった。

論じる箇所によっては、データに現れた結果をもたらした理由が明確には指摘できなかった箇所も存在するが、今後理由を探るべき新たな課題を設定できたのだと考えたい。

本研究では、共起して用いられる度合いが特に顕著なものについて重点的に論じたが、

一方で共起例がほとんど得られなかったものについても、取り立てて本研究で述べはしなかったものの、「大規模コーパスを調査しても出現しない」という結果そのものが、その組み合わせの「用いられにくさ」をものがたるものだと考えることができる。

今後は個別の意味分類だけではなく、どれだけの分類項目と共起するかという分布など、より全体的な視野からの考察も必要であろう。さらには意味分類だけではなく、各形式ごとの異なり語数などを利用するなど、今後さらに分析を精密化することも可能であると考えられる。何よりも、今回得たデータの範囲でもまだ各形式に認められるすべての特徴を論じきれたわけではないので、全体を論じるためにさらに考察を進めたい。

参考文献

Narrog, Heiko (2009) *Modality in Japanese: The Layered Structure of the Clause and Hierarchies of Functional Categories*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.

国立国語研究所 (編) (2004) 『分類語彙表 (増補改訂版)』 東京: 大日本図書.

佐藤雄亮 (近刊) 「〈(の) だろう〉 〈(の) だろうか〉 を含む引用節と主節述部・被修飾名詞の関連性—BCCWJ のデータから—」 『コーパスに基づく言語学教育研究報告』 6. 東京外国語大学大学院総合国際学研究院グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育拠点」

高梨信乃 (2002) 「第 3 章 評価のモダリティ」 宮崎 (他) 『新日本語文法選書 4 モダリティ』 79-120.

ナロック ハイコ (2006) 「従属節におけるモダリティ形式の使用」 『日本語文法』 6-1: 21-37.

日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』 東京: くろしお出版.

_____ (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』 東京: くろしお出版.

藤田保幸 (1986) 「文中引用句『～ト』による『引用』を整理する」 宮治裕 (編) 『論集日本語研究 (一) 現代編』 206-230. 東京: 明治書院.

_____ (2000) 『国語引用構文の研究』 大阪: 和泉書院.

南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 東京: 大修館書店.

_____ (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 東京: 大修館書店.

宮崎和人 (2002) 「第 4 章 認識のモダリティ」 宮崎 (他) 『新日本語文法選書 4 モダリティ』 121-171.

宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書 4 モダリティ』 東京: くろしお出版.

森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 東京: 明治書院.

The correlation between modals in the quotative clause and the predicate or modified noun
in the main clause in Japanese

Sato, Yusuke

(The Graduate School of Area and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies)

Abstract

The present study reveals that the meanings of modals in quotative clauses are reflected in the meanings and the numerical distribution of main predicates or modified nouns with which they co-occur. Consideration is based on attested examples culled from the BCCWJ corpus, which are also analysed statistically. The result of this study will also function as the complementary data for the semantic description of the modals.